
「あの人が一番可哀想。でも僕が一番可哀想だと思うのは貴女だと思う。～出逢い編～」

永遠十

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「あの人が一番可哀想。でも僕が一番可哀想だと思うのは貴女だと思う。くっ出逢い編く」

【Nコード】

N9426F

【作者名】

永遠十

【あらすじ】

新撰組とある乙女の出逢いそれはやはり運命なのかもしれない。

第一話（前書き）

新撰組を題材にしていますが、私の勝手な想像や思いなのでそれを御理解頂けたら幸いです。

第一話

登場人物

梅：
主人公

梅の
母

梅の
父

新撰組

芹沢
鴨

新見
彰

他：

私は今労該を患っている。きっともう長くはないだろう。

あの人が死んだと聞いた時も、こんな風に紅梅が咲いていた。

そう、いつもそうだ幼い頃は紅梅が好きだった。

母に

「この花は貴女の花ですよ。」

と言われて、髪につけて、微笑んで頭を撫でてくれたときはとても嬉しかった。

そう、あの時まででは大好きだった。

でも、それから8年後に私は親に売られた。父親の酒代の代わりにと。

そして、私は遊廓に連れて行かれた。

その途中で、ある男にぶつかってしまったが、そのまま引き摺られて遊廓に向かった。

その時その男と目があつたような気がした。

その男は少し、驚いた様な顔をしていたように見えた。

そして、遊廓に着いた私は風呂に入れられ、着物を着せられ、店に出た。

私を此処に連れて来た男は言っていた。

「この娘は家柄にしては上玉ですので売るのは勿体無いですよ。それに売るなら高く売った方が良い」と、

その頃椿にぶつかった男は考えていた。

酒を飲みに来たのにどうもすすまない、

何故か、さっきぶつかった娘が気になってしょうがないので、

仲間達に

「悪いが少し用事ができた、俺は先に帰らせてもらう、金は置いておくから好きなだけ飲んで帰って来い。ではな。」

と言に残し去って行ってしまった。

残された者達は喜び、てんやわんやの大騒ぎになった。

その中の一人を除いては、皆に

「あの方がいくら好きなだけ飲んでも良いと言われても程々にしてください。」とお灸をすえた。

その頃男は駆けずり回って、

娘が居そうな遊廓を探していた。そして店に出ている娘を見つけ出し、店主を呼びつけ

「あの娘はいくらだ。」

と男が聞くと店主が、

「いくらだと申されても少ない錢では困りますので…」

と言葉を濁すと男は怒り腰にさしていた刀を抜き店主に向けると、

「店主ごときが武士を愚弄するか、貴様俺を誰だと思っているんだ。」

と怒なり散らすと、店主が怯え、

「すつすみませんどうか謝りますのでご勘弁を。」

と主が頭を下げると、男は通じたのか刀をしまい

「で、いくらで娘を売るんだ。」

と聞くと、

「では、このくらいでは如何でしょう？」

と言うと男は納得したのか、錢を払い娘を連れて店をあとにした。

娘と男が帰る途中娘が、

「どうして、私を引き取ったんですか？」

と聞くと、男はニコツと笑って

「なんとなく。」
と言うと、

「なんとなくで人を引き取るんですか？」と娘が言うと、男は

「俺といるのが嫌ならこの手を離せば良い、そうしたらお前は自由だ。何処にでも行けば良い。」

と言うと娘は心の中で、この人は私が何処にも行けないことを知っていてこんな事を言っているんだ。

だから全てを見透かしたような、何喰わぬ顔で私を見てるんだ。と思った。

そして男がじーっと娘を見つめているので、

解りきって従うのは少し腹が立つので、ムスツとして顔を反らした。すると男が何か言い出そうとしたとき、

男の傍に誰か近づいて来たので、

娘はサツと男の後ろに隠れた。するとその男が

「芹沢先生何処行つてたんですか？勝手な行動は控えてくださいと
いつも言っているでしょう」

と言うと男は

「そう言うなや今日はもう疲れたんや、もう帰って寝る。後は頼む
わ」

と言ひ娘を後ろから引き摺り出し

「そうやこいつの事頼むわ。そついや名前聞いてなかったな何ていうんや」

と言つと娘は、

「梅です。」

と言つと、芹沢が

「そうか。梅いうんか、良い名前やな。」

と言ひ梅の頭を撫でた。そして、

「俺の名前は芹沢鴨や、ほんで此方は新見彰、他にもおるんやけど後は知らんでええわ。新見、他の奴には言つなよ」

と言ひ歩き出した。

梅は芹沢にくつつき顔を隠して共に歩き出した。

それを見ていた新見彰は不信に思い、

一人考えていたが、梅に向かって走りだし、

「女、なぜ名しか名乗らん。」

と言い肩を掴むと梅は、

「私には名しかありません。親に捨てられたのです。もう思い出したくもありません。」

と新見の手を振り払い着物で顔を隠し震えていると、新見は啞然とした顔で

「すまんかった」

と言ひ芹沢は

「新見もう解ったんなら梅に手え出すなよ。なんぼこいつが別嬪じや言つても梅は俺のもんやからな」

と言つと新見は、

「そんなんじやありません。ただ何処のもんか分からんかったら困る思ただけです。」

と言ひそうこうしている間に屯所に着きました。

これが私とあの人との出逢いでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9426f/>

「あの人が一番可哀想。でも僕が一番可哀想だと思うのは貴女だと思う。～出

2010年10月28日03時11分発行